

Title	活力ある若い医学研究者を育てる難しさと楽しみ
Author(s)	郡, 健二郎
Citation	癌と人. 26 P.16-P.17
Issue Date	1999-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/23795">http://hdl.handle.net/11094/23795</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 活力ある若い医学研究者を育てる難しさと楽しみ

郡 健二郎\*

私事で恐縮ですが、私は六年前に大阪の近畿大学から当大学へ赴任しました。大学における主な仕事は診療、研究、教育の三本柱ですが、この中で診療と、診療に於いて後輩を指導することは、他の二つの柱に比べて比較的容易であります。それは、私を含め診療を本業としているからです。ここでは、日頃私が悩みつつ考えている研究と教育の二つの柱について、自問自答する形でまとめ、これからの糧にしたいと思います。出来れば皆様方のアドバイスやご意見を頂けたらと思っております。

医療の進歩は著しいものがあります。しかし、情報が瞬次に広く伝わるようになった為に、大学病院と一般の市中病院との医療内容に大きな差が無くなりつつあるのが現状です。そこで私たち大学病院に課せられた主な仕事は、先端的な研究をする事と将来の日本の医療を支える若い仲間を育てることだと思っております。私が特に力を注いでいる事は教育で、私一人では力に限界がありますので、優秀な多くの若手を育てる事により、私が描く診療や研究に於ける夢を何倍にも大きくして実現して行くことが出来ます。しかし、教育ほど難しいものはないと感じている日々であります。

私は今までに国立、私立、そして現在の公立の病院を経験し、それぞれの特徴を知りました。それぞれの設立母体の長所を取り入れて、現在の職場に活かそうと思ったり、発展をとげられた教室が行っておられるシステムや、研究や教育のノウハウを私たちの教室に取り入れても、直ちに成功しないことも経験してきました。それは単に物まねにしかすぎず、各教室の事情が異なることは勿論、そこで働く人達の個性、考

え方、能力あるいは将来への生活設計が違うからです。

このような教育への苦勞は、全国の医学部に於て共通しているもので、私たちの教室だけが特殊では無いようです。というのは、医学部を卒業した者の多くは、医療に従事することを目的（本業）にしており、研究は二次的と考えている人達が多い事が主な理由です。一方、農学部、理学部或いは、薬学部を卒業した研究者は研究が本業であることもあり、研究に真摯で、研究内容も素晴らしいものがあり、医学部卒業の研究者の遅れが気になります。

このような環境下であって、いかにして若い医師達に研究に興味を持たせ、根気よく研究を続け、それを論文としてまとめるかを、飴とムチで指導していますが、多くの医師は、博士論文を仕上げるまでの研究で終わることが多く、長続きしないのが現状です。

医学部に入学した学生にアンケートをしますと、90%近くが将来は研究もしたいと思っております。現在の医学生の学力は優れたものがあり、本来その能力を医学以外の他の領域で活かすべき人達が、医学部に入学していると感じることもあります。医学部に入学した20歳前後の時には、難病の病態を解明し治療法を開発しよう、といった夢を抱いている人が多いのですが、卒業時にはその比率は減り、研究をすべき年齢（卒業して2年から数年後）にはその意欲が失せている者たちが多くなるのも現状です。これは、全国的に見られる憂慮すべき現実です。

外国を見ると、アメリカとヨーロッパとで若干異なります。アメリカでは医学研究は医師以

\* 名古屋市立大学医学部泌尿器科学教室 平成9年度研究助成金交付者

外の人たちがやっていることが多く両刀使いはやはり難しいようです。しかし、ヨーロッパでは、優れた研究をする医師が多く見られます。これは、わが国に於ける医療や医学の歴史と一致するもので、わが国が模範としてきた国は、戦前ではドイツを中心としたヨーロッパであり、戦後はアメリカに移ったことです。すなわち、わが国の先輩達は医療の傍らで研究していましたが、現在は前に述べたように変わりつつあります。

医学研究において大切なことは、医療の現場から生じた疑問に基づき研究をすべきであり、そしてその成果を再び医療現場に戻すことです。従って、現在のように病気或いは患者さんからかけ離れた研究が多くなっていくことに懸念するものでもあります。これからも貴財団から助成を頂いたことを新たなきっかけとして、若い人たちを育てることの難しさを楽しみながら行いつつ、患者さんに貢献できる医学研究を進めたいと思っております。

